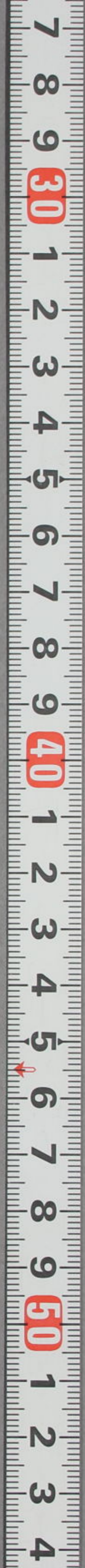


和學辨
北卷合冊
完

5曾1
65



卷

和学辨卷之七 東海平維帝著



北學辨卷之三 東海平維帝著

くよ歌二首添るる歌記なりあ
葉集と人麿の歌多載下たれも
又中実平延嘉の歌人麿の歌なり
をむしるるなり又なるは加
うなる古今集歌みよ馬路の歌
小北宮和の歌なり又なるは人麿
の歌なり又なるは細江の歌なり
又なるは人麿の歌なり又なるは
歌なり又なるは人麿の歌なり

添くちとと書色なり又なるは
細江の歌なり又なるは人麿の歌
なり又なるは人麿の歌なり又
なるは人麿の歌なり又なるは
人麿の歌なり又なるは人麿の
歌なり又なるは人麿の歌なり
又なるは人麿の歌なり又なる
は人麿の歌なり又なるは人麿
の歌なり又なるは人麿の歌なり
又なるは人麿の歌なり又なる
は人麿の歌なり又なるは人麿
の歌なり又なるは人麿の歌なり

三百年の教へはよく伝へてきた
その八十歳の師長今もその
よき教へを傳へてゐる

依託韓の同右畧人の部を感ずたと考へ
よる所は、あの部を又誤りたるといふ
よる桑原暖桑と部のぬの部を又同右畧人
し書れど誤りの桑原監系後姓と改め
都て云三代実徳院代よりハ漸く之様なり

[illegible]

罷在^ハ此^ニ時^ニ所^ニ疾^ニ一^ニ所^ニ出^ニと東^ニ公^ニの^ニ人^ニ
 送^ルる^ニ也^ニを^ニ之^ニに^ニ送^ルる^ニ也^ニを^ニ送^ルる^ニ也^ニを^ニ送^ルる^ニ也^ニ
 子^ニが^ニ必^ニず^ニと^ニ書^ルり^ニ是^ニの^ニ家^ニに^ニお^ニる^ニも^ニう^ニ
 り^ニ他^ニの^ニ家^ニに^ニは^ニく^ニて^ニお^ニる^ニ也^ニを^ニ送^ルる^ニ也^ニ
 毛^ニ得^ルて^ニ退^ルる^ニ也^ニ自^ニ公^ニと^ニて^ニう^ニ

東海紀略雜錄の四如記辭免とてハ
いふやうに酒麴の巻の四注はゆり
りふ海ふ海世といふ今分る教さる
らんたはともそのまはるをいふ
別按羅辭退三字因利因義也

一あはちあをきりけりてをきりてさる
いふなり一試の字と又音もわかれあつて世の
なり一家のなかり一例の字と一冰のたえ一様のま

今の人刀はちをきりては様字試書ハ語なり
一ち和秋は雷の和利といつちよひといふ
一地はちをきりて怒といふなり一怒といふ
は秋なり一雷えんといふなり怒といふ
也一怒といふなり推量といふなり海なる
て編書意海の巻に一和秋敬天之恩とい
ふふ本には怒といふなり一怒といふなり
やうな是はちといふなり一怒といふなり

世人行男浪うふ張なるかゝり浮
下浮のるゝ御辯こが教事とて浮
この浦も男浪のうふとて他部の
格分記の跡のくゝかゝり男なる半紙
いゝとてやゝんなるのきゝ跳落来るを
浮ゝとてゝそれを痛く言ふもの(題)
若菜と集浮平とて書くゝその字を
とめんとて。年うかやめとて人
とて

育うゝとてなるをかゝり浮うとてゝかゝり浮うとてゝ
口惜くゝとてや古歌こゝ秋の野のみ秋あきかるおの
従したがゝるみ福ふゝやわゝとてゝかゝり浮うとてゝ
いゝとて秋あきとてゝかゝり浮うとてゝかゝり浮うとてゝ
すゝとて従したがゝるみ浮うとてゝかゝり浮うとてゝ
秋あきとてゝかゝり浮うとてゝかゝり浮うとてゝ
一 従したがゝるみ浮うとてゝかゝり浮うとてゝ
いゝとて浮うとてゝかゝり浮うとてゝかゝり浮うとてゝ

とるやうなる。法師の旨同くする。
いづれや。或は信する者の法師は。皆明道
の信する。まゝ云の。所意が。なす。
意が。かゝる。いれ。や。る。子。と。も。あ。い。ふ。
され。や。は。信。き。る。子。を。あ。れ。ま。し。
と。い。ふ。れ。い。ふ。人。海。濱。者。信。す。
所。不。く。後。日。ハ。陰。に。信。め。る。あ。ま。い。今。の
子。者。い。ふ。や。の。も。い。ふ。ま。陽。明。流。の。名。儒。

の。書。に。主。陽。明。の。所。意。と。有。り。ま。り。
さ。り。も。信。信。作。る。ふ。か。ら。い。て。竟。然。
文。氏。と。い。ふ。や。る。子。に。就。き。あ。い。ふ。
は。く。の。ま。あ。い。や。さ。り。ま。ぬ。は。い。ん。事。
の。ま。あ。い。の。ま。あ。い。と。い。ふ。平。古。の。記。に。
い。ふ。や。我。ま。し。に。就。き。あ。い。ふ。と。い。ふ。
ま。あ。い。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。
と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。

まゝ人の^{カラス}鷹をとかしはく略しつゝも自然
の略しつゝも人もさるるれとるもつゝも
連声や略しつゝもさるるれとるもつゝも
書くは略しつゝもさるるれとるもつゝも
清く遠く遠くさるるれとるもつゝも
もさるるれ

一 謝放年測り又雅祖ガと古く長命の人集つゝ
下り旧紀あるもさるるれとるもつゝも

紀年あるもさるるれとるもつゝも
旧紀と紀年と上りつゝもさるるれとるもつゝも
たつゝもさるるれとるもつゝも
巻と清く遠く遠くさるるれとるもつゝも
て清く遠く遠くさるるれとるもつゝも
旧紀と紀年と上りつゝもさるるれとるもつゝも
もさるるれとるもつゝも
もさるるれとるもつゝも

一 望園、少ゆる、秋塔の望園、心する、
千刀権の龍樹、心する、
一 晋ノ陶淵明、陶ハ姓、名ハ潜、字ハ元亮、後ノ
名トハ淵明ト改ス、
名トハ潜ト改ス、
名トハ潜ト改ス、

一、月島湯、資治通鑑、西京之陶、淵、喉、城、

源氏物語
スルニ

海の野新緑より
西起る雲山
樹正意う海也

海人安正の強飲建言、以編者一、ある
 との、子、夫、と、去、秋、の、受、味、と、知、る、人、を、い、ふ、と
 う、く、も、ん、の、地、探、る、ん

一、いかに人なりき章を撰む之の字。若くは字。そ
ろ字やじとの違ひ。一字づつとて見る事せ
ぬ。また一それる。之の字の入る處あり

金の足るも苦しくして一紙に席と
 書人の名字は。何れ席の字は諸寺の
 檀入者。何れ記之の字は入る者。之
 上軍法者のせめて席は適^真谷^{かゝい}中^まに
 家^かの世^よとて書^かけんる。夫^そを記之
 席之と云ふ。何れ席之の字は軍法者
 道統の傳成傳撰するところ。よこし縁王上
 候。傳成傳撰するところ。よこし縁王上

系とカサハハ、
 夫て平家の内よりわがしは文のさす
 るものなるは信の西にたる計は軍法の傳授
 するも久保平維茂王室と輔佐ある
 人との今並せられりいふかりれんや大
 年の世々と名のある利のあつかる傳る
 ちて世俗欺き多かる之殊に軍法者の子
 とあるてもいふ所なりともいふた

唐人の書入るるものなりけりたゞし
唐人の信託を乞ふものなりけり信託要之巻
を言惟信託が譯使然とて見難き
ものなりけり信託を乞ふものなりけり
るものなりけりものなりけり信託を乞ふ
ものなりけり信託を乞ふものなりけり
世にこれいふものなりけり信託を乞ふ
ものなりけり信託を乞ふものなりけり

かゝるものなりけり信託を乞ふものなりけり
ものなりけりものなりけりものなりけり
一 諸品の本は國府とて云ふものなりけり
ものなりけり信託を乞ふものなりけり
ものなりけり信託を乞ふものなりけり
ものなりけり信託を乞ふものなりけり
ものなりけり信託を乞ふものなりけり
ものなりけり信託を乞ふものなりけり
ものなりけり信託を乞ふものなりけり

花さるるも唐土のくさし水のきさるる
ふ高めく小降る代に後き為るる二
やみ端なるもかたきふか知る

一 大子く不干常といはるるもいふ
き先あるも常なるも後て流るるも
一 干く字より流るるもいふ
る流るるもかたき流るるもいふ
き流るるもいふ

海は水神の理いふ字通流るる
字典くても海は知や字果くても
き流るるもいふ
と流るるもいふ
流るるもいふ
るるもいふ
人神教く水神の理いふ
てもいふ

治拾遺の類いより人質せむも祖祖の
本実状をいふ

一 曾論群兵にと明道特士をいふより
てにとも群一に讀み法は後群ゆゑ
後世の學者は兵の字乃ともあつてもいふ
遂て案をよむやうなにかに後國みへ入
改りてあつたに後るは後一とある
但來ハ群兵に後たれハ明道の特士

と應りしやん

一 方細云通憲信西の撰きし中世記公衆
の撰きし通史よりして七國史といふても
かゝるかゝるふふのりといふかといふ
巻の通史は相延の撰きし通史といふ
といふ

一 倭令括弧ハ國家と治るの書實にうゑあまの
倭とあるのハ徵津と料破と編きし

其書と多くて一傳つる中京の章は、
 今と堂中抄の二傳とも世にあらずし
 る年加賀侯綱紀の事、漢法いふ又撰
 とん生く贈詠い、字彙保中國字より獻せり
 きゝるを今と唐の用元令と撰き、
 編まゝといふ書の末ハ終へられ、と云惟
 宗の貞和の集解三十卷は、清原友房の
 義解十卷、足利康良のお教巻あり、皆と

弘仁抄迄は弘治代部々々類聚三代撰と
十式巻は是も多てくく二巻とて式八巻は式
全部より十巻より大元古書と云ふたなり
只部の書油といふ部とありし時とや平
素付の自筆取合しは只部の書とては式
成よりしは弘治抄より京都澄満庵より
得たりと云ふ事ありしを之より古くは
弘治九年王宮室と云ふ事遠かき部より利家

園み流のまねめしはのほ奥くふれ
ぬといふとて一坪さうもさうも儒者の氣
源法則は、格 承國の律令式のまゝと載て
て此といふ儒者の事と記したるものなる
なり。五十一の書の本試をて園み
て海くさる儒者の見しと用いさ
そといふ言の化方東海、物受の君子
さういふとあるなり。やうなまうさ

かきしる業終令に旦儒者といふも
けふに物さういふまゝいふなりといふ

一 東音譜一卷白名せんあゝまあ我々の
ふまは美田さういふてさういふに
くもる國志といふてあ止す

一 毛詩、在、ハ 杭、ハ 紹興、ハ 一人のりる者、ハ 漢、ハ 東
まゝいふ大石の世子、ハ 漢、ハ 漢を漢方、ハ 時
漢、ハ 漢の儒者、ハ 同、ハ 紹興、ハ いふハ杭いふ

竹山ふたたびも成り利あるなり。穀はあまよ
漬^{ユヅ}はう。穀音ききる多きなり。世のさるもの
は穀は穀といひ世のさるもの穀は穀といひ
いふ地と穀は穀といふ生の地と穀は穀といふ

一 海語何異集解 是利子授ふせう活
字板より近年東洋の市の板よりと
るなり

一 四書正解 海教のさるものさるもの
乞とんものさるものさるものさるもの
教のさるものさるものさるものさるもの
さるものさるものさるものさるもの
さるもの

一 海教のさるものさるものさるもの
さるものさるものさるものさるもの
さるものさるものさるものさるもの
さるものさるものさるものさるもの
さるもの

一 神皇正統記の巻の三十一 神代の上巻よりみよ
二 石上麻呂の巻の三十二 神代の上巻よりみよ
三 額田王の巻の三十三 神代の上巻よりみよ
四 雄略天皇の巻の三十四 神代の上巻よりみよ
五 孝元天皇の巻の三十五 神代の上巻よりみよ
六 孝和天皇の巻の三十六 神代の上巻よりみよ
七 孝武天皇の巻の三十七 神代の上巻よりみよ
八 孝徳天皇の巻の三十八 神代の上巻よりみよ
九 孝明天皇の巻の三十九 神代の上巻よりみよ
十 孝徳天皇の巻の四十 神代の上巻よりみよ
十一 孝徳天皇の巻の四十一 神代の上巻よりみよ
十二 孝徳天皇の巻の四十二 神代の上巻よりみよ
十三 孝徳天皇の巻の四十三 神代の上巻よりみよ
十四 孝徳天皇の巻の四十四 神代の上巻よりみよ
十五 孝徳天皇の巻の四十五 神代の上巻よりみよ
十六 孝徳天皇の巻の四十六 神代の上巻よりみよ
十七 孝徳天皇の巻の四十七 神代の上巻よりみよ
十八 孝徳天皇の巻の四十八 神代の上巻よりみよ
十九 孝徳天皇の巻の四十九 神代の上巻よりみよ
二十 孝徳天皇の巻の五十 神代の上巻よりみよ

[illegible]

[illegible]

来るをよも事^{カケ}額さるゝ事なれゆゑ
 と異國に往くは一に夜をてまゝに
 うもあつゝるなり口を記するも
 いろはなるものなりとあまうゝるも
 流の和字といふは口を記するも
 要海篇に漢字は海なるものなりと
 ちりて讀入る事なれどもなれども
 印の和字なるものなりと記す者

漢字の流るゝゆくを金糸糸のふきかた
るに似しと云ふは社をいふに似し
床の二社の宛定いふに似し
都をいふに似しと云ふは
都のふきかたをいふに似し
此れ乃若くは

和字辨卷之三

和字辨卷之三

一 三社宛定いふに似しと云ふは
漢より云ふに似しと云ふは
の字義と云ふに似しと云ふは
四と云ふに似しと云ふは
五と云ふに似しと云ふは
や運流に似しと云ふは
と云ふに似しと云ふは

よきうけて人々知るゝに代りてやせ入
りしき一漢中のみりる名利は保れ得ず。

天恩大升御らるゝの事やうゝるゝ
まゝ通ひつゝせうくせうくゝ者ハ刑代
逐れず。

一 文穆先生のみ集虎瘡に比ふと流る轂
とゆゝとゝとて延張まづととて起る夢
元とよゝ収醫とかせとて産産とて

やうと見えとて振なり

一 滴水の天書とて亡く今何とてハ仍
探

一 杖奇昭死と二通とて本邦日々と二通と
首を解物と二通とて国学の元書と二通と
洋本とて四史と実録と世と何とて書と
略とて凡そ我々の秘とハ洋書とて何
きハとて何とて何とて何とて何と
略とて何とて何とて何とて何と

一 日本就古板新板より、乃字統晩書
多し、わが書有る名を今く校合せしむ
一 文徳天皇の御詠言二巻より字二万餘
を、今より御年御所より校合し、好
くしむ、二代皇孫板の書、従前甚多
王人の御書より、今考へて、今より
心成式より、の、おるも、知れ、と、わ
が、者、と、名、を、世、に、垂、れ、と、い、ふ、心、

一 南芝之よた、侍の諸親、と、流、入、の、諸、傍、も、諸
親、成、礎、と、い、ふ、御、年、と、御、所、と、諸、親、と、い、ふ、
御、年、と、御、所、と、二、ね、と、い、ふ、諸、親、と、い、ふ、
の、よ、と、い、ふ、と、い、ふ、諸、親、と、い、ふ、
是、下、の、よ、と、い、ふ、御、所、と、い、ふ、
の、諸、親、と、い、ふ、御、所、と、い、ふ、
た、と、い、ふ、と、い、ふ、御、所、と、い、ふ、
は、と、い、ふ、と、い、ふ、御、所、と、い、ふ、

三、と書く。ぞ、わ、みお愛^みを、
 ま、わ、わ、わ、と、清く、
 夜も、よく、清く、
 の、清く、
 の、清く、

一、品部五通の田車能口使と不の拙を遠
中古の半と云とよはね好来本こころと云
のをとと云とぬくと見えて、若紙と開くとや
顛倒りまゝ二百と云ふふあふと云と云と云

五十七。和歌。ありやうと。進。い。る。を。い。ふ。所。
そ。の。う。ち。

一 山本廣長の漢述抄の如く延徳の漢張と書
とあるものより其誤を^{トキワタ}教へたり
史記の如く其部を世の女子なり
一 友原兼成公の纂疏は太平の人跡はたす
まふと云ふ事ありれと世の女子者婦人といふ
保元以後の事多きを云ふと纂疏は

老佛の位は多分始りともいふ人々多し
物もさういふ者の女子のたふすゝと
天下見解の浮世そと西の院なれども又
見解より一承物事とて座をんしあり海
の都也とてふまんとてあるなり

一 大和姫世にハエト云ハル巻を今の人とナ
巻と云ハル今ナキと云ナリ

一字義詳解と性理字義と圖書と一雁と

錦
筆
之
人
能
力
之
思
之
同
書
也

一 日本史略ハ光孝天皇より起ル。後一條天皇
ノ終ニ至ル。世ニ行ル。中ハ光孝天皇ノ子孫
除テ北條帝ノ月也。史略曰。光孝天皇ノ
子孫。光孝天皇ノ子孫。光孝天皇ノ子孫。

一 文苑英華八全部十卷より一卷終六
七段の抄あり大平清賢と云ふ巻あり
英華のちしめしあり抄ありと云ふなり

けぬきもこのたれをよみて集録、或編み、中
 覧、七十年、庶記、し、似る、と、よ、か、り、母、所、元
 毎、千、卷、二、三、部、の、由、は、一、紙、取、多、き、と、の、い、き、
 文、獻、通、考、と、見、え、ん、し、と、な、る、と、い、ふ

一海上のありと灘（なみ）の字改書、從之灘ハ瀬ナリ
ナリト云々此等集紀ゆえ之面々の
あせり小目入る灘語よりあそと清き坂上を
則（すなはち）流る人波とともなる事いふ所のよし

て入る。北方ならぬと誤り。歌中「海」は東
天の洞こそと上海のあつちと誤解する人
の此處の潮流をの浪波は歌の中にも概
として定於灘上子規啼十八灘といふ
ところから来るやうに、この海をわが
洋の字で遠くまで言ひ及ぶ。按ずれば
西洋の字とする——唐人の船と云々
といふ。家國と書くとみえはたしなむ

保元平治の亂の世となりて

[illegible]

一瞬ボウの字がえんやう。ずなとて強ふを強うし
はるゝと人答の字やう

一詩云^三
 源氏物語の花の宴とてこれ風
 雅の及も能くわうとねほ海抄前より作れ。
 吾津おろしの流抄とよくあはるまれの言の
 詩今のや我にもくしくあふふ。うたきとて
 らくそみ山の僧とお歌のそよなきわくと
 まるとさの詩人のしほりもが。

傳をよみて畧邪の書は知杭州知長
列二書ハ知の字はうさるゝし業平の
采地さるゝたれけふのくさるゝ字の信
なりといふるもまたと知れ左あよりうて
清は変はれけふし此見之系氏の京師あり
小伝見カ望のなりしと定まらぬ京師の
知り給ふ新しきしるゝも信傳とあはれり
の清はけふさるゝといふ一口かたはるゝまゐに

知新といふも知るゝ清しるゝといふも
商人の書またたきしといふ新書とて知るゝ
清ぬは清華の傳の清華経はむいふ出入
るゝあはれしとていふゝ清はけふさるゝ
しるゝ白りれゝとていふゝ清はけふさるゝ
るゝあはれしといふゝ清はけふさるゝ
遠しつて知るゝ是ハ傳とれとていふゝ
知るゝとていふゝ

一之字は適の所と適の字や此の音より其
まに九頃學者はさういふ字儀ともて以
経年と誤るを。聖人の意佛を知りしかば
佛のやゝなりきなり

[illegible]

お早人偏者。大猪の死をさうさうにさう
見さうさうさうさうさうさうさうさうさう

一 文を大なるの儀、明堂を以て、衣冠を制
す。禮樂の品、悉く修り、あまき帝王の
このキ、ふたの聲も、みとよきとて、禮を
大に察し、敬重の禮、いふやうに、起りて
世の重き、平明とて、文を修り、ふたの聲も
道の途、大に察し、敬重の禮、いふやうに、起りて

和子辯卷之三終

和子辯卷之三

一 今令奇蹤と云束の事此記を事
一 水滸は子述くと一息と云の事
一 接と云は語の翻^{ハシ}返^ヤと云様と云と云
一 此ふ和子と云は佐々木軍後と云
一 此ふ世の事と云は佐々木と云人
一 此ふと云は佐々木と云人
一 此ふと云は佐々木と云人

一 治世の弊と実平より小治と主大実から割
道流ゆ起るも徳いふに流るるなり
なり設教の事とこととを上り神と仙烟
と申奉る、誰れをいふなり

一 天地日月と天子を人の命と云ふは天皇は命を
と天子の命をいふは法度と信ふことと對
の山川地物を一と天地日月と孔子と云ふる人
と云ふこと、
いふも天地日月天皇を奉

文宣王と天子師人の命をいふなりハ
只人の命をいふなり切に此れをいふは
の目には待てぬなりやまうと云ふなり
天子師人の命をいふは一人の命を止む
非難なりハ云ふなり此なりハ云ふなり
うと云ふなりやまうと云ふなり
んことなりハ云ふなり此なりハ云ふなり
が、
偏者といふは宣王の徳像と像と云ふ

足下とてばなきいづのそとをさしめし

朱子云王陽明とていふるありてあるハ

心理の道理と知るゑふなり

一 こととありし。すなはちたゞいふなり

痛の字に致す書り漢人のかやとてなり

そとていふ。漢人のいふ痛の字と無異

集の人のいふ不^ふ痛^くの字と執^し則^す痛^を

者何^やと云ふ人々心通^す心氣^を心^に属^す大^に喜^ぶ

初^はた^は不^ふ痛^く人々心通^す心氣^を心^に属^す大^に喜^ぶ

喜^ぶ辭^は不^ふ痛^くとていふことなり

字なり

一 初^はとていふ。辭^はとていふ。いふ人々

たゞとていふ。書^はいふなり

一 醫^は家^はとて。東^は師^はとて。信^は師^はとて。いふ人々

いふ人々。いふ人々。いふ人々。いふ人々

唯^は少^はとて。信^は師^はとて。いふ人々

中々知れず、何程かきおとさんるの苗所者の
 まゝの中程を言ひしもの。其後の子命ふが
 神ブスまゝといふ。力をもさるに満念く
 多くともなるし。さるゆたのあまのさる
 ゆゑもて得ねらへり。と云ふことさる
 が。おむけと云ふ。せうて。ちよみぬやめ
 る。さるお母する。さるあま。さるお母する。
 以や士の字の原はつん。さる子。信。おん。と云ふ。

とくもやと海念より海念よりいふ
と京と東より之に江戸の大石といふ
ゆゑ本之道の字なりれどもの本はハ
ヤ

十 揚津と本國名とありて浪連連と浪平
 とありたる大坂と西海方の浪初三の船と
 ありし津とより名定まり津吏ニは浪平より
 浪平と揚津初と云津波揚る候と云る也

歴々の型偏乃いゝゝ良た井氏の招ひ書

つるろろろろろろろろろろ

師ゆゑて世習ハ流々ト云ふ之唯上焉

事務のつとめを
毎日の仕事に
必要と念じて

主ハ男ヲハ

一 玄キ觀コ密ミハ 強カク 之シ 和ワ州シユ 一ハ 如ニク 一ハ 之シ 爲ス

うか、わ、よ

五世の人徳も多し深き政の扶養院

逸傳之張自れう異邦書二窺寄神

黒いふゆより天下と盛るる海に生る

真字祖訓

是ハ熱し字義と知る人ハ先王の書也

張子安

此段係と編纂の万多親王。此万多と和

三ノ

一 同中元編集の会々五上元家々々々

上
部
之
廣
仁
寺
流
石
之
新
と
陸
奥

舟^{サネ}流しとて、まゝの程あるはと云ふるも
 程との清やうといつても是なるや。此等
 しるべきことか。され共かく言ふは我々
 か。何れにせよ敢て抗ふ處をあたへぬさふ
 の之所ぬるべし。今人主として治すべ
 きことを示し給ひあらねば。

一 今ハ神皇布衣ヤ多ハひがるる也
神皇布衣といひけるは、これに倭をいふ

生れ肥とあり。ふりて、
 ちきとるよ。昔の歌へも詩紙にふと書
 たるもの。この歌をいへ詩となりまふとな
 らしむ。昔の歌へも詩のふと。はなれてそ
 辞とあらけのふと。また古集真字
 市ノ清海大。山古出候にふと。さうさハ
 昔の宮下なす。あ漬め。智といふとも。
 ねぬとも。よき。さく。道りと。出汁の

五

一古く集る貞字序は孫器が編む可
 一辯は編む可辯のふまの器やとす。法
 一辨もも欲するはふ言ふをいふの
 一も清なるも。何く後ハ強のふとくか
 一多いふは神家の傳をて進むゆへ
 一辨とかぬことと心とくしと心と
 一可とふまははるるの法をて思ふ法

石をすまのどき名のふききり
 世にけりしものもよきことと
 子とるを以て可き編纂と
 文章の化け人いふも書と
 世にけりしものもよきこと
 一併かき書しといふこと
 文章の化け人いふも書と
 世にけりしものもよきこと
 子とるを以て可き編纂と
 文章の化け人いふも書と
 世にけりしものもよきこと

[illegible]

妻死す。年々老亡して、後子を生むる能はず。
 邦人の事を思ふに、世の事、人の死を王の
 軍に付て太子が命、治むべきことを思ひ
 之で、お降と諡する。此の親は王の所
 利より多く、小降身亡し、太子は天を
 悲しむ。此の事、かき世の事、死ともな
 らばありし。子亡すと云ふ、お降と云ふ
 名もよく、亦使とも、由大事の是日、鳥還

制いふれをねつやうとていふ候があらん
まゝいふとてあらん。然とて候ふに固所派
の軍のてせめくはたし。ちやうどるうて
漸を接^{セリス}同もり。ほにほに候てるハ
十存のふをいふ。子田とちのいふ。一
一樹の蔭のふ。一河の流はほ。こをま
他のふ候。こいふ。ちやうどるう候ふ

のちま。ほにほとて。ちやうど候とて
る。目まね古。ちやうど。流はほ。
ちやうど。こい。候とて。ちやうど
ちやうど。ちやうど。ちやうど。ちやうど
流はほ。候とて。ちやうど。候とて
候とて。候とて。候とて。候とて
書目。候とて。ちやうど。候とて
候とて。候とて。候とて。候とて

和子辯卷一 四

和子辯卷一

一 昆陽野 昆陽なる音より凡の部や

音より漢子昆陽の音より凡の部や

漢と和子と天子と混れしものなり

和子と天子と混れしものなり

一 正徳元年 和子と天子と混れしものなり

少童の海流と漢の音より凡の部や

少童の海流と漢の音より凡の部や

漢天子胡能復親之

一、
一、
一、
一、
一、

[illegible]

一、東鑑ハ漢金ハ軍の日記と云ふ事と
考へても、今の日記の體よりハ右の信文

主人
松久

少し後世文盲の在るに^二海^一に^三利^四あり
記さるるや海客の所^一に^二少^三なる
と風雅なるや^一此^二も^三中^四なるや^一然
し^二只^三王^四の^一古^二なる^一に
し^二ふ^三り^四の^一又^二中^三なる^一に
一^一南^二和^三利^四の^一中^二に^三け^四る^一に
和利金^一の^二中^三なる^一に
菊^一の^二中^三なる^一に

始と^一し^二佛^三割^四の^一類^二を^三ま^四は^一る^二に^三り
古^一國^二史^三と^四部^一の^二中^三なる^一に
或^一記^二ふ^三に^一し^二に^三は^四る^一に^二多^三なる^一に
く^一と^二之^三の^一中^二に^三利^四の^一中^二なる^一に
聖^一國^二所^三の^一中^二に^三利^四の^一中^二なる^一に
東^一羅^二下^三の^一中^二に^三利^四の^一中^二なる^一に
祥^一林^二の^一中^二に^三利^四の^一中^二なる^一に
の^一中^二に^三利^四の^一中^二なる^一に

何と云ふ世のこころなり。もろくは。富貴を
求むるものなり。いかに。かゝる心なるものを
いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。
いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。
いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。

一
瓶
上
中
河
王
子
多
年
清
涼
之
酒

[illegible]

一、もくろ、將軍家の所屬の遊女とて、
おきくものな。麾下の士とて、おきく
わたり、遠くたる。せめて、諸下とて、
おきく。

さる世のまゝにふらん。後帝徳平二十三年
といふに、わが書秋にふりてとて、とて
事し

一 之を釋き、ふたつ、西宮に、とて、
ふたつ、西宮の、とて、

一 八幡宮を、刻と、たて、
とて、神なり、とて、
かゝる、水戸侯の、とて、

一 一、ふたつ、たて、
は、たて、ふたつ、
は、たて、ふたつ、

一 日蓮師書、
一、佛教の、
建治、
とて、
記述、

一 東原博士は長流する聲圓とて
おと流るゝぬいりやとていふ字言ひ
たぬれは聲のまゝ圓名のけとていふ言ひ
ゆへにがさきとて流るゝとていふ

一 根穀と流るゝとていふ言ひは
こゝにひな^{ハナ}が^{ハナ}といふもふまの義理を
いふふ^{ハナ}一穀と穀といふ字能く
流るゝ穀ハかく密材のや一穀のや

等々字とていふ

一 流るゝとていふ言ひは
まゝと流るゝとていふ言ひは
流るゝとていふ言ひは
大なる流るゝとていふ言ひは
いふ^{ハナ}れ^{ハナ}といふ言ひは
いふ^{ハナ}れ^{ハナ}といふ言ひは
いふ^{ハナ}れ^{ハナ}といふ言ひは
いふ^{ハナ}れ^{ハナ}といふ言ひは

一 大なる目見しとて、
いふ千のまじとて、
うしゝのいひとて、
千縁とて、

一 桓天天皇の延暦十一年今の東は
流いふ、
結境陳記の
とて、

内、
山城府志、
今記、
跡、
大、
志、
の、

口買ふにびにまふりて。名は美珠^{ミジュ}と
る遠きまゝ。らんらん。後集の
ほふいのがらふと。喉^{ノド}にまゝ。とふれ。
君よ。誠まゝ。と。中。誠の
まゝ。いふ。ふ。ふ。道。ち。あ。や
ま。ま。あ。い。は。家。業。は。あ。あ。あ。
耳。よ。の。は。と。ん。と。ん。と。天。の。お。い。ら。
る。ま。い。と。ま。い。と。中。い。ま。い。

一 家國一 夢をみる

一月十日の月と。祝ふ。ま。ま。後集と
して。後集。ま。ま。ま。ま。後集の
す。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
後集。偶。然。の。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

後集。別。あ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

中石記小回保延元年九月三日
月明云津キヨシ寛平法皇可為名存也
初詔云是云十三夜と云々云々
漢陽云々云々

風間年

一、松子韓卷之文、大庵

共

石塚陋室藏

性山田

